

東京YMCA

2026

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

いざという時のために ～地域とつながり、いのちを守る備え～

7月、熊本で地震が発生しました。東京YMCAでは、8月10日から職員延べ9人を現地に派遣し、支援活動を行っています。世界各地で、地震や水害などの災害が起きている。東京YMCAでは、日ごろから「防災」について考え、備えることを大切にしています。個人で、家族で、地域で、いざというときに支え合える関係性を育てることも、私たちが大切にしている備えの一つです。



熊本支援報告

防災は一人ひとりの日常にある

「知る」から「行動」するへ



東雲児童館 主任 杉原雅俊

わりではありません。社会を取り巻く災害リスクや防災の考え方も少しずつ変化し、また子どもたちの成長とともに防災への理解の深まり方も変わります。東雲児童館では、毎年「防災キャンプ」を実施し、子どもたちが楽しみながら防災について学び、自らのいのちを守る力を育む機会を大切にしています。また、繰り返し体験することで、災害時に必要

な判断や行動が自然と身につく、自分だけでなく、周囲の人を思いやる心も育まれると考えています。

今年の防災キャンプ（7月25日・26日実施）では、防災体験学習施設「そなエリア東京（江東区有明）」で、地震災害

「災害スタディ」続けて8年 地域の絆を深める 東陽町

毎年9月1日は「防災の日」です。東陽町コミュニティセンターでは、2018年より、この日を地域全体で大切に、限られた物資を工夫して活用するプログラムを取り入れました。身近なものを活用して生活する方法を考えたり、非常食を実際に食べてみることで、「もし自分だったらどうするだろう」と主体的に考える時間となりました。また、グループを作り、自分たちの生活体験

やグループワークを通して、子どもたち同士が意見を交わし、仲間たちの考え方に触れる機会も設けました。

防災キャンプは、備えの知識を学ぶことだけでなく、周囲の人と協力し合うことが大切と考える機会も設けました。今回のキャンプでも、子どもたちは仲間と声を掛け合い、助け合いながら課題に取り組み、「自分にできることは何か」「困っている人がいたらどう行動するか」をたくさん考えていました。

キャンプを通して、「防災」とは地域や社会とのつながりの中で支え合うことでもあると感じてく

れたらと思います。これからも、さらに知識を得て理解を深め、それを日常生活につなげていくことが、本当の意味での防災につながります。

防災は、一人ひとりの日常の中にある。家庭で非常持ち出し袋を確認する「避難場所や連絡方法を家族で話し合う」なども大切な備えの一つです。防災キャンプで得た気づきが、子ども



消防車を知る

防災キャンプに参加して、いざという時にどうしたらいいかわかりました。そなエリアにいらした、そなエリアでは色々な問題をこまめに友達との仲間ふかまりました。

6年 Y.M.

防災キャンプで学んだこと、防災キャンプでは硬い床で寝たり、非常食を食べたりして本当に災害が起きた時にすぐ対応できるように頑張りました。

災害時必要な物などそなエリア東京で学ばせていただいたり、消防士の方々に来ていただいたり消化体験をさせていただいたりしました。色々な事を体験しました。

6年 S.Y.

子どもたちより

防災は一人ひとりの日常にある。家庭で非常持ち出し袋を確認する「避難場所や連絡方法を家族で話し合う」なども大切な備えの一つです。防災キャンプで得た気づきが、子ども



ダンボールで簡易トイレづくり

災害はある日突然起こります。いざというとき、私たちが支え、助け合える関係を築けるように、東陽町の地東京YMCAが活動をスタートして今年で38年。地域の方々と共に歩み培ってきた信頼は、かけがえのない財産です。何よりの防災対策であり、災害に強い町づくりにつながることを考えています。共に支えあい助け合うことが当たり前に行われる社会になることを願っています。（東陽町コミュニティセンター プログラムコーディネーター 沖利柯）

防災に「これで終わり」というゴールはありません。新しい仲間も交えながら、地域の皆さんと共に毎年欠かさず継続して、災害に強い町づくりにつながることを考えています。共に支えあい助け合うことが当たり前に行われる社会になることを願っています。（東陽町コミュニティセンター プログラムコーディネーター 沖利柯）

赤三角

和顔施（わがんせ）という言葉を聞いたのは、東日本大震災のときです。無財の七施（むざいのななせ）の2番目に

伊藤幾夫

災害の現場から学ぶ 明日への備え



日常の活動経験が 非常時に活きる

2011年 東日本大震災

2011年3月11日、日本の観測史上最大となるマグニチュード9の地震が発生し、大きな揺れと巨大な津波により、東北地方を中心に甚大な被害がもたらされました。

2011年3月11日、日ごろからYMCAが培った経験と人とのつながりが災害時に大きな力となりました。ワークキャンプにチャレンが関わり、歌の広場にボランティアが通い続けまし

言葉・文化の壁越え 再建まで寄り添う

1999年 台湾地震

1999年9月21日、台湾中部に大地震が発生しました。私は台北YMCAに長期出向中で、発災直後から台北YMCAが立ち上げた災害支援活動センターのメンバーとして、被災地の南投縣埔里（なんとうけんぷり）へ車で入り、現地支援に携わりました。

1999年9月21日、台湾中部に大地震が発生しました。私は台北YMCAに長期出向中で、発災直後から台北YMCAが立ち上げた災害支援活動センターのメンバーとして、被災地の南投縣埔里（なんとうけんぷり）へ車で入り、現地支援に携わりました。



息の長い取り組みですが、YMCA単体や行政だけで担えるものではありません。同じ志を持つ団体や地域の方々と連携しながら、YMCAが得意とする分野で役立てていく、手探りの歩みとなります。地域の人々が主役として、いざという時に被災された方々の力になれるよう日頃から備えを怠らず、必要とされた時に迅速に対応できる体制を整えていくことが大切です。YMCAが必要とされる場所で被災された方々やコミュニティに寄り添い、共に生きる、そんな存在になることが我々のミッションのひとつになり得ると思います。

(国際ホテル専門学校 久保田 徹)

絵本を読み聞かせ 保育士の被災者支援

2016年 熊本地震

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。

『次は先生が鬼ばい』。じゃんけんに勝った子どもたちが駆けだした先には熊本YMCA永草保育園の広大な園庭が広がっていました。周りには阿蘇の山々が連なる熊本県阿蘇市。明るく元気に遊ぶ子どもたちも働く職員も、全員が被災者でした。



不安や緊張を抱えている学生ボランティアたちが、倒壊家屋の撤去作業Ⅱ写真Ⅱなどをしながら、過酷な状況下でも逞しく

不安や緊張を抱えている学生ボランティアたちが、倒壊家屋の撤去作業Ⅱ写真Ⅱなどをしながら、過酷な状況下でも逞しく



東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

東京からの応援メッセージ
た横濱YMCAの保育士と派遣された保育園の被災状況を共有しました。短い期間でしたが、多くの子どもが私を受け入れてくれました。中でも、地震直後から不安な様子が続いていた一歳

離れていても支え続ける YMCAができること

2024年 能登地震・水害

2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災者支援のため、1月24日から輪島市町野町（まののまち）の避難所を手伝うことになり、3月末まで東京YMCAが支援物資やインフラの整

2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災者支援のため、1月24日から輪島市町野町（まののまち）の避難所を手伝うことになり、3月末まで東京YMCAが支援物資やインフラの整

2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災者支援のため、1月24日から輪島市町野町（まののまち）の避難所を手伝うことになり、3月末まで東京YMCAが支援物資やインフラの整



水害の泥かき作業

今年七月二十八日に発生した熊本地震は、震度が十年前の同地の地震M六・五を超えるM七・一であったという。最近各地で「天変地異」現象が多発である。YMCA史学会は、こうした自然災害への対応の歴史も学び直してきた。

今年七月二十八日に発生した熊本地震は、震度が十年前の同地の地震M六・五を超えるM七・一であったという。最近各地で「天変地異」現象が多発である。YMCA史学会は、こうした自然災害への対応の歴史も学び直してきた。

今年七月二十八日に発生した熊本地震は、震度が十年前の同地の地震M六・五を超えるM七・一であったという。最近各地で「天変地異」現象が多発である。YMCA史学会は、こうした自然災害への対応の歴史も学び直してきた。

今年七月二十八日に発生した熊本地震は、震度が十年前の同地の地震M六・五を超えるM七・一であったという。最近各地で「天変地異」現象が多発である。YMCA史学会は、こうした自然災害への対応の歴史も学び直してきた。

今年七月二十八日に発生した熊本地震は、震度が十年前の同地の地震M六・五を超えるM七・一であったという。最近各地で「天変地異」現象が多発である。YMCA史学会は、こうした自然災害への対応の歴史も学び直してきた。

シリーズ
資料室の窓から<129>
自然災害と
YMCA
本会元副総主事 齊藤 實

「日本を襲った自然災害に対しては異なる。諸活動の拠点であつたYMCAの働き」を元・京都YMCA総主事 高谷泰市が発表している。初めに「東大震災を取り上げ、伊勢湾台風（一九五九年九月）による大水害と阪神・淡路大震災（一九九五年一月十七日）に

「日本を襲った自然災害に対しては異なる。諸活動の拠点であつたYMCAの働き」を元・京都YMCA総主事 高谷泰市が発表している。初めに「東大震災を取り上げ、伊勢湾台風（一九五九年九月）による大水害と阪神・淡路大震災（一九九五年一月十七日）に

子どもたちを笑顔にしよう 学生ボランティアも奮闘

＝下町こどもダイニング

東陽町コミュニティセンターでは毎月、家族と一緒にご飯を食べる機会が少ない子どもたち（例えば、保護者が弟や妹など下の子のお世話で忙しい）のために、「下町こどもダイニング」を開催しています。



食事前には学生のボランティアリーダーと一緒に遊ぶ時間があります。「食べる幸せ」と「遊ぶ楽しさ」を感じてもらいながら、ご家族と一緒に楽しく食事をする場となることを目的に開催しています。

普段の「こどもダイニング」では、大人のボランティアが調理を担当し、高校生や大学生のリーダーたちは子どもとの遊びを担当しています。

7月26日の「夏休みスペシャル」では、調理から遊び相手まで高校生と大学生の学生ボランティアが担当しました。



当日は10人の高校生と大学生が参加しましたが、その多くがボランティア初体験でした。「将来教育に携わりたい」「子どもと触れ合いたい」「ボランティアを体験したい」など様々な思いでの参加でした。

遊びと調理のグループに分かれて準備を進め、調理グループは、いつも調理担当ボランティアからアドバイスを受け、カレーライス作りに奮闘。包丁を握るのが初めてという学生も、得意な学生と力を合わせて丁寧な仕上げをしました。写真上。

【調理担当ボランティア】「子どもたちが何度もおかわりをし、『美味しかった！ありがとう』と声をかけてくれたので安心して、嬉しかったです。これを作りながら、学生たちに残る体験となり、参加した子どもたちや保護者の方々が皆あふれる笑顔で、活動終了後、学生たちからは次のような感想が寄せられ、心強い言葉もありました。

△△△

参加した学生たちのほとんどから「ボランティアで今日だけで終わらせず、自分のためにも新しい友達づくりや大人のコミュニティの場になっていることを実感した。」

△△△

暑い夏の日曜日、短い時間ではありましたが、学生たちにとっては心に残る体験となり、参加した子どもたちや保護者の方々が皆あふれる笑顔で、活動終了後、学生たちからは次のような感想が寄せられ、心強い言葉もありました。

△△△

参加した学生たちのほとんどから「ボランティアで今日だけで終わらせず、自分のためにも新しい友達づくりや大人のコミュニティの場になっていることを実感した。」

災害への意識変わる ゼロから学ぶ防災研修

保育園ねがい

保育園では毎年、担当者が年間の避難訓練計画を立てますが、「災害時に何を大切にするべきか」を話し合ううちに、疑問がたかさん湧き、防災の研修を希望しました。7月25日、「NPO法人せたがや防災士会」の菊池頭太郎さんを講師に「ゼロから学ぶ、本当の備え」大切な子ども達と自分の命を守ることをテーマに園内研修

が実施され、職員20人が参加しました。

これまで園の避難訓練では、時間・場所・状況などを想定して計画書通りに行っていました。防災に関する知識や考え方には、見直すべき点がいくつもあることに気がきました。特に印象に残ったのは「まずは大人が自分の命を守ることが、子どもたちを守ることにつながる」という考え方を立てていこうと考えています。防災リユクも、職員で話し合う時間を設け、クラスの防災リユクの中身を「本当に必要なもの」を考えることを通して、職員一人ひとりの意識を高めることができました。

△△△

「The organisations young people no longer need-and how to not be one」を「Young people, AI and the future of work what should YMCAdo next」などの複数の講演に参加して感じたのは、「YMCAは若者に対して、また社会の課題に対して何ができるのか」「若者に必要とされる組織であるためにはどうしたらいいのか」という切り口が多かったように思います。

△△△

世界YMCA Vision2030という、世界中のYMCAがともに起こそうとしている大きな変革に、参加者それぞれが、自分が所属する小さな世界から参画し、うねりを生み出していくことが求められているのだと強く感じました。

△△△

「The organisations young people no longer need-and how to not be one」を「Young people, AI and the future of work what should YMCAdo next」などの複数の講演に参加して感じたのは、「YMCAは若者に対して、また社会の課題に対して何ができるのか」「若者に必要とされる組織であるためにはどうしたらいいのか」という切り口が多かったように思います。

仲間から受けた刺激を糧に 第21回世界YMCA大会

inカナダ

「Transformー変革 YMCAdo」に参加し、よくなっていく」を。世界80以上の国と地域から約1300人が参加した写真。この大会は「高尾の森わくわくビレッジ」という小さな世界で働いている私にとって、未知との遭遇、そして驚きの連続となりました。

世界中のYMCAの仲間の話を聞く中で感じたのは、目まぐるしく変わっていく世の中への不安と同時に、その不安に負けずに世界をよりよく変えていこうという熱い思いです。

自分の今までのYMCAでの経験の中から、YMCAは組織体ではなく、活動体であるという話を思い出しました。YMCAという組織が大切なのではなく、世の中を良くするためにYMCAは何をしていくか、であることと理解しています。

△△△

世界YMCA Vision2030という、世界中のYMCAがともに起こそうとしている大きな変革に、参加者それぞれが、自分が所属する小さな世界から参画し、うねりを生み出していくことが求められているのだと強く感じました。

△△△

「The organisations young people no longer need-and how to not be one」を「Young people, AI and the future of work what should YMCAdo next」などの複数の講演に参加して感じたのは、「YMCAは若者に対して、また社会の課題に対して何ができるのか」「若者に必要とされる組織であるためにはどうしたらいいのか」という切り口が多かったように思います。

野の花、空の鳥

東京YMCA総主事
星野 太郎



頃、懐中電灯を片手に静かに自宅を抜け出します。今日はどんな収穫があるだろうか。この歳になっても、クワガタ探しの魅力にとりつかれたままです。自宅の近くには武蔵野の雑木林が残っており、そこには多くのカブトムシやクワガタがいます。毎年シーズンになると、思い立っては家の抜け出し、その日の出合いに一喜一憂しています。

地域の子どものために、そして私にとって大切な雑木林ですが、今年は大規模な手入れが行われ、クヌギやコナラの多くが枝を大きく落とされ、丸裸になり、いくつかの木は間引かれました。毎年クワガタが集まっていた私の「行きつけの木」も、切り株になっていました。とてもショックでしたが、林には掲

示があり、雑木林を計画的に維持・更新していくための伐採だと説明されていました。

しまいましたが、長い目で見れば、虫たちにとっても必要なことなのかもしれません。一見スカスカになってしまった雑木林ですが、これは10年先、20年先を見据えてのこと。私は目の前のことしか見えていません。

ていくことなのでしょう。YMCAの働きも、大きな木になることだけが大切なのではないはず。次の芽にちゃんと光が届いているかを気に留めること。枝を広げすぎているなら、ときには場所を譲ること。そして、10年先にも森が育ち続けているためにはどうしたらよいかを考えること。そんな視点を持つていたいと思います。

世界中のYMCAの仲間の話を聞く中で感じたのは、目まぐるしく変わっていく世の中への不安と同時に、その不安に負けずに世界をよりよく変えていこうという熱い思いです。

自分の今までのYMCAでの経験の中から、YMCAは組織体ではなく、活動体であるという話を思い出しました。YMCAという組織が大切なのではなく、世の中を良くするためにYMCAは何をしていくか、であることと理解しています。

△△△

世界YMCA Vision2030という、世界中のYMCAがともに起こそうとしている大きな変革に、参加者それぞれが、自分が所属する小さな世界から参画し、うねりを生み出していくことが求められているのだと強く感じました。

武蔵野の雑木林

頃、懐中電灯を片手に静かに自宅を抜け出します。今日はどんな収穫があるだろうか。この歳になっても、クワガタ探しの魅力にとりつかれたままです。自宅の近くには武蔵野の雑木林が残っており、そこには多くのカブトムシやクワガタがいます。毎年シーズンになると、思い立っては家の抜け出し、その日の出合いに一喜一憂しています。

森を適切に保全することは、こうした管理が欠かせないのではありません。何かを受け継いでいくとは、同じものをそのまま残すことではなく、更

ちなみに、カブトムシとクワガタはどちらも憧れの昆虫ですが、私はスマートな姿と種類の豊富さから、断然クワガタ派です。

熊本地震支援街頭募金@東雲エリア

8月5日にグランチャ東雲前で、東雲エリアのYMCAスタッフやその家族など33人で、熊本地震緊急支援街頭募金を行いました。一人ひとりの気持ちを込めた呼びかけに、買い物や仕事帰り、保育園・幼稚園のお迎えの保護者など、多くの方が足を止めて、募金に協力してくださいました。

地域の方や、普段グランチャ東雲を利用している方にとっても、見知ったスタッフがいることが、安心して声をかけるきっかけになったと感じています。中には中学生のグループや、「お金を下ろして来ました」という方もいて、地域とのつながりや温かさを改めて実感する機会にもなりました。



左から3人目が筆者

＜熊本地震YMCA支援募金＞
継続的な支援活動のためにご協力をお願いします。
【銀行振込】
三菱UFJ銀行 神保町支店 (013) 普通 2304804
ザイ) トウキョウワイエムシイエ
＊お名前の前に「クマモト」とお入れください



